



Title	龍舟競漕の比較研究序説：中国を中心にして
Author(s)	黄, 麗雲
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1982, 16, p. 25-42
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56500
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

龍舟競漕の比較研究序説

——中国を中心にして——

黄 麗 雲

I はじめに

私が日・中両国における民俗行事の比較研究の対象として「龍舟競漕」を取りあげた理由は、つぎの四つの点にある。(1)龍が民族行事と呼ばれる祭り事に不可欠な神的要素(超能力の具現化した要素)を強く持っているものと考えられたこと自体にも興味があるが、(2)ましてや、神体そのものと考えられる舟を龍の憑代として、舳に龍の頭、艫に龍の尾をつけて龍舟という名をつけた人間の思惟を面白く思う。(3)龍舟で競漕を行なう動機はこれを祭神に対する奉納行為と考えた点にあるのか、それとも行事を催す根本的な目的に対する占い行為と考えた点にあるのか、その疑問点を解明してみる必要があると思う。また(4)長崎ペーロン、沖縄ハーリー、台湾の扒龍船の三者がともに中国系の龍舟競漕を祖形としながら、それぞれの地域の条件によってどのように変容したかを歴史的・地理的に追究してみたいのである。

修士論文では上記の三者の比較に重点をおいたのであるが、小稿では、これら三者の源流をなす中国大陆の龍舟および龍舟競漕をとりあげ、他日報告する本論の序説とさせて頂く次第である。

II 中国式の龍舟

a. 龍舟の種類と形状

まず、黒岩義嗣氏の龍舟三種説⁽¹⁾((1)舟遊用、(2)祭祀用、(3)戦艦用の三種)

に基づいて中国式龍舟の種類を検討してみたい。普通、舟遊用の龍舟というと、貴族専用のものと見做されるかもしれないが、中国では天子しか使えないものである。これは、天子は龍種であるという思想を中国人は持つために、たとえ貴族であっても、龍舟を使うことができないからである。従って、黒岩義嗣氏のいわゆる舟遊用龍舟は、中国では天子用龍舟と称する方が適当だと思う。

さて、天子用龍舟の形状だが、天子は即ち龍であるから、天子用としての龍舟は必ずしも龍の飾りものをつけなくてもよい。天子の乗用する舟はすべて、舟の形を問わず、一切龍舟と呼ばれる。中国の詩人・蔣翹氏は「天啓宮詞」という詩において、唐熹宗が端午の節句に船に乗って競漕に参加した様子を生き生きと描写した。その詩「招招黃帽繡旂衝，三翼乘流羯鼓從。何用船頭鱗鱖活，中央萬歲是真龍。」⁽²⁾の最後にある「萬歲」とは天子を指すものであり、その天子が真龍なのである。この表現はまさしく「天子用としての龍舟は必ずしも龍の飾りものをつけなくてもよい」という私案を立証するものであろう。

とは言っても、勿論、天子用としての龍舟には龍の飾りものをつけて、豪華さをきわめたものも数え切れない。有名なものは隋煬帝時代につくられた龍舟である。⁽³⁾

つぎに、黒岩義嗣氏のいわゆる祭祀用としての龍舟は、中国では競漕用としての龍舟と呼ばれる方が普遍的であるように思われる。何故かというと、祭祀用としての龍舟といえば、何かを祈願するために、神を祀るものとなり、宗教的色彩が濃くなってしまふからである。勿論、未だ農耕社会の段階において、中国では龍舟を競漕することによって、祭祀の目的を達成することもあった。しかし、中国の漢の時代以後、祭祀用としての龍舟は娯楽の目的をもって競漕されるようになった。⁽⁴⁾従って、祭祀用というよりも競漕用といった方が適切だと思う。

また、競漕用としての龍舟は一体どのような形をしているだろう。

『荆楚歲時記』⁽⁵⁾によれば、唐以前の競漕用船は龍頭、龍尾などの飾りものをつけず、舳に龍頭を、艫には龍尾をつけ、また舷には龍鱗を描くようになったのは唐朝から始まったという。

最後に戦艦用としての龍舟についてだが、これについては、ほとんど中国の古文書には記載されていない。ただ、龍舟競漕をするときの戦闘意識を表わした記録があるだけである。宋人張岱はかつて「怒」「悍」「絢」「鏑」「危」「險」の七字をもって、瓜州で行なわれた龍舟競漕においてその戦闘意識を表わした。その原文は『陶庵夢憶』に見える。『瓜州龍船一、二十隻、刻畫龍頭尾、取其怒；傍坐二十人持大楫、取其悍；中用綵篷、前後旌幢繡傘、取其絢；撞鉦撾鼓、取其節；艄後列軍器一架、取其鏑；龍頭上一人足倒豎，戔戔其上，取其危；龍尾掛一小兒，取其險。』とある。⁽⁶⁾これをみても、要するに中国には戦闘用としての龍舟はなかったと考えてよいだろう。

以上を総括するとき、中国における龍舟は(1)天子用の舟遊船(2)競漕用のものの二種に分類されると私は考える。

b. 龍舟の機能と龍の意義

この節では天子用としての龍舟と競漕用としての龍舟とについて、それぞれの龍舟の機能と龍の意義を追究してみたいと思う。

天子用としての龍舟は遊興のために使われるものであるから、その機能は享楽のためといえる。西暦605年8月隋煬帝は龍舟に乗って、洛陽から出発して揚州あたりを遊舟したことがあった。⁽⁷⁾さらに、宋の画家・張擇端が描いている「金明池争標圖」には宋の帝王が龍舟に乗って「龍舟争標」などの活動を玩賞している光景が描かれている。⁽⁸⁾この二つの例にも見られるように、天子が龍舟を使用する目的は享楽である。

つぎに、天子と結びつく龍の意義とは何かを考えてみよう。『史記』孝武本紀や『前漢書』郊祀志にある「……有龍垂胡頷，下迎黃帝，黃帝上騎……」などの説話は、天子が龍の化身であると見做されてから後に記述されたものだが、これによれば龍は天に昇るものと考えられていた事実が知られる。龍は天子を乗せて天へ昇るのである。

また、『竹書紀年』⁽⁹⁾、『水経注』⁽¹⁰⁾、『拾遺記』⁽¹¹⁾などの記録によれば遠古にある中国の農耕社会にあっては、水をよく治める者（黃帝，堯，禹など）のみが王者としての資格を有するとされてきたこともわかる。

一方、龍は水生動物であるが故に水を司り、降雨の呪力を有し、それが大地の多産を齎すと信じられていた。従って、水神たる龍と水を治める国君とが結合されたことは当然だと思われる。以上によって天子と結びつく龍の意義は、(1)天に昇る特性を持つ、(2)水生動物で、水を司る特性をも持つとまとめることができる。

つぎには、競漕用としての龍舟の機能について述べてみよう。桑山竜平氏は水の神を祀るため、豊作を祈るため、雨乞いのために競漕は行なわれたのだらうと述べている。山本達郎氏もかつて「競渡考」で「競漕は水の神の祭りであると共に、雨と豊饒とを齎すべき呪術であつたのではなからうか」と述べている。⁽¹²⁾また、馬淵東一氏の『爬竜船について』⁽¹³⁾には、タイ族、越族で行なわれた龍舟競漕は首狩習俗から転じた人間を水中に投げ水神に働きかけて、降雨と豊作を願うというものであつたとの記述が見える。⁽¹⁴⁾

以上をまとめてみると、競漕用龍舟の機能は主として、(1)雨乞いのため、(2)水神祭のため、(3)豊作を祈るための三つにはほかならないようだが、文崇一氏は『九歌中的水神與華南的龍舟賽神』において、これらの三つの機能のほかに、競漕用龍舟には巫術の目的もあると結論している。⁽¹⁵⁾つまり、「疫病の驅除」と「無事平安」を祈る呪術的な目的を持っていたというのである。

また、競漕ということを屈原の故事と関連させて考えてみても、最初の

目的は屈原を救うためだったかもしれないが、次第に時代が下って行くにつれて、本来の意味を失ない、一般水死者の霊を祭るために行なわれるようになったと考えられる。

このような競漕用としての龍舟の機能から見て、その龍の意義は種々様々である。龍が不思議な力を持つものと考えられるようになったのは龍が神格化、人格化された後のことだと思われる。神格化された龍はよく雨神、水神、龍神などの形をとる。一方、人格化された龍はよく龍王、海龍王の姿で表わされる。龍が雨神と考えられたわけは、龍は雨を降らすと信じられていたからである。『呂覽』召類篇には「以龍致雨」とあり、それは初めて龍と雨との関係を記した文献だと文崇一氏は指摘している。⁽¹⁶⁾このように、龍は雨をもたらす神であるから、雨乞いを目的とする競漕に、龍を象った船を使うのは当然とすべきであろう。

では、水神祭や豊作祈りを目的とする競漕に、何故龍の飾りをつけた船を使わなければならないのか。それは龍が水の中にいるもの、あるいは水に縁あるものと考えられていたことによる。いうまでもなく、水神祭と豊作祈りの主たる目的は龍神（龍神＝水神）⁽¹⁷⁾の水を司る呪力によって、農作物に必要な水を齎してくれるよう、そして、洪水・氾濫が起らないようにと願うことにある。

つぎに、競漕によって屈原を救おうとした故事とは、龍には江を翻す力があり、⁽¹⁸⁾そのために河の水をまき上げて、屈原を発見しやすくすると信じられたために、船に龍の型を象って、屈原の死体を競漕して捜したことをいう。また、逐疫禳災のため、競漕に龍舟を使ったわけは、船に象った龍の形が海の主である海龍王を投影したものだからであろう。黄石氏はおつて『端午礼俗史』において、幽明両界の水府に住んでいる水府の主—海龍王が逐疫禳災の威力を持つことをあげ、また、そこに龍舟が龍の型を象った原因を求めている。⁽¹⁹⁾

以上、競漕用龍舟の機能とそれに結びつく龍の意義を考えてみた。次の表を参照されたい。



Ⅲ 中国における龍舟競漕の由来

中国系龍舟競漕の由来については、現在に至っても未だ定説が出されていない。以下、「中国説話」と研究者の諸説を検討してみよう。

a. 中国説話

中国説話のうちから、龍舟競漕の由来を示すと考えられる説話、つまり、屈原説、伍子胥説、勾踐説、曹娥説、呉王夫差説を取り上げ、私の考えを述べたい。

(1) 屈原説

『荆楚歳時記』に「五月五日…是日競渡，採雜葉。案：五月五日競渡，俗為屈原投汨羅日，傷其死，故命舟楫以拯之。」とあり、また『隋書』⁽²⁰⁾地理志に「屈原以五月望日赴汨羅，土人追至洞庭不見，湖大舡小，莫得濟者，乃歌曰，何由得之渡湖，因爾鼓櫂爭歸，競合亭上，習以相戲。」とあるのは、どちらも屈原故事と結びつけて、競漕の由来を説くものである。屈原は戦国時代における楚国懷王の朝臣で、不幸にして、上官大夫靳尚一派に誹謗され、懷王の信任を失った。また懷王の子、襄王が即位するに至って、長沙に左遷された。忠臣一途な屈原は、9篇の文章を書いて、自らの気概を陳述したが、結局屈原の気概は受けいれられなかったのも、彼は最後に漁夫辭を書いて、五月五日汨羅江すなわち今の錢塘江に身を投げて自殺した。楚国の人々は屈原が投身すると、すぐ舟を出して競争するように搜したが、ついに搜しあたらなかった。人々は屈原の忠貞高潔な精神を偲び自殺を惜しんで、端午の節句に競漕を行なう形式で敬拝するようになった。

(2) 伍子胥説

『荆楚歳時記』に「邯鄲淳曹娥碑云，五月五日，時迎伍君（子胥），逆濤而上，為水所淹，斯又東吳之俗，事在子胥，不關屈平也。」とある。こ

れは競漕の由来を呉子胥故事と結びつけて説くものである。

伍子胥とは春秋時代の楚人であり、初め楚の平王に仕えたが、父および兄が平王に殺されたので、呉に走り、楚を討って平王の墓をあばき、復讐の念をはらした。その後、越を攻めるに功があったが、呉王夫差が讒言を信じて自決を命じたので、呉国の前途を呪いつつ死んだ。夫差は怒ってその死体を革袋に入れて銭塘江に投じた。呉人は憐んでこれを祀ったという。

『荆楚歳時記』によれば、曹娥の父が、五月五日船に乗って、伍子胥の霊を迎えようとしたが、逆に溺れてしまったとある。このことは伍子胥の霊を五月五日に迎えようと東呉の人々が船を江に出したことを示すものである。

(3) 勾踐説

『荆楚歳時記』には、「越地傳云」として、越地では龍舟競漕は「起於越王勾踐，不可詳矣。…」だと記されている。また『歳時雜記』には「五日競渡起於越王勾踐，後以為極屈原。世人遂以為戲。」と記されている。なお、唐の韓鄂の『歳華紀麗』には「因勾踐以成風，屈原而為俗」とあり、『三才藻異』には「競渡起於勾踐，後人弔屈原，遂以為戲」とある。以上の諸文献は、競漕は越王勾踐から始まったとしている。勾踐故事とは勾踐圖強説にはほかならない。越王勾踐は呉王夫差と対立していたが、遂に呉王夫差にやぶれ、呉の俘虜になった。勾踐は越国をもう一度復興させるために、遊びとしての競漕の名目で、ひそかに水夫を訓練した。その水夫を訓練することが後の龍舟競漕の起源になったと考えられる。

(4) 曹娥説

曹娥のことは『後漢書』⁽²¹⁾列女伝に見えるが、曹娥故事を競漕の起源とするいい伝えが「閒談端午節」⁽²²⁾に記されている。つまり、孝女曹娥は東漢時代の人物で、ある日、父が江に溺死した。その時、曹娥は14才であったが、父の死体を捜そうとした。17日間も捜したが、とうとう見つからなかった

ので、嘆いて江に身を投じた。その日はちょうど五月五日であった。数日後、彼女の死体が発見された。不思議なことに、彼女の死体の背中には父の死体がおぶさっていた。当地の人々はこれを見て、心をうたれた。人々は曹娥の親孝行を記念するために、その江を曹娥江と名づけ、その江で毎年五月五日に曹娥の像を乗せた船を使って、競漕を行なったのである。

(5) 呉王夫差説

范寅の『越諺』には、「攄龍船始於呉王夫差與西施為水戲，繼弔屈原為競渡。…」と記されている。即ち、龍船を漕ぐことは呉王夫差と西施の遊びとして始められたものであるという。

上述の(1)、(2)、(4)、三つの説話から、中国人はもともと忠と孝という二大倫理観念を大切にす民族であることがうかがい知られる。一方、中国人のこういう倫理観は別にして、民俗学的視点に立ってこれらの伝説と龍舟競漕との関係を考えている人がいる。柳沢新治氏は「船漕ぎ祭りの道」⁽²³⁾において、屈原や伍子胥を主人公にした起源伝説をもつ競渡は五月五日の祭りだったが、もっともこの日は、この地方で水神を祈る日だったらしいと考えておられる。なお、その水神と屈原や伍子胥のように立派な人物で怨みをのんで死んだ人への恐れとが一つになり、屈原や伍子胥の霊を慰めるために祭りをする、というふうに変っていたものととらえ、また、屈原のためにチマキを川や海に投ずる風習があるところから、水神や水死者に供物を投ずるために船を漕いでまわる風習が、いつしか競漕の形に変わったのではなかろうかと推定している。

また、それを守屋美都雄氏らは雨神説あるいは人身御供説と関連させて考えておられる。河中の雨神の実体が次第に人格化されて、それが屈原という人物に結びつけられたとも考えられるし、また、むかし河中の雨神に対して人身御供を行なった時代があって、その人身が屈原に結びつけられたのではないかと考えられるのである。しかし、この悲劇の主人公は必

ずしも屈原に限らないという点である。一般には、競渡の起源は屈原の投身に結びつけられる場合が多いけれども、曹娥碑の伍子胥の例もあり、地方によって伝説の主人公は異っている。ただ、これらの人物のいずれも屍を水中に沈めたと伝えられているところに一つの共通点があり、そこに人身御供の遺制といった想像も生まれるわけである。と守屋氏は述べている。⁽²⁴⁾

いうまでもなく、龍舟競漕は民俗行事の一つである。従って、それと絡んで作られてきた中国説話は柳沢新治氏や守屋美都雄氏らの考えるように、民俗学的視点から解釈をする必要もあると思う。

b. 研究者の諸説

この節では、以下の四人の学者の研究を紹介したい。

(1) エバーハルトの説

エバーハルト (Eberhard, Wolfram) は、中国の民俗を研究したドイツの学者である。『古代シナにおける地方諸文化』と『シナの祭礼』の二著作において、中国における龍舟競漕の由来について論旨を展開している。前者で、彼は中国式龍舟競漕はもともと越族の文化に由来すると考える。また、後者では、広東その他の南シナ海沿岸に溺死した女の言い伝えがあることをあげている。父親の水死を悲しみ投身自殺した女性の屍体に、生前より美しく香ばしい匂いすらあったところから、龍舟競漕を始め、その女性の霊を祀るようになったというものである。これは中国説話における曹娥故事に該当するものであろう。

さらに、エバーハルトは上の著作で龍舟競漕を特にタイ族の文化と結びつけて論じている。即ち、はるか以前、タイ族では毎年人間を水中に投じ犠牲に供することにより、水神にはたらきかけて、水田のための降雨と豊作を願うという風習があった。これが龍舟競漕と結びつき、競漕を行なう

二つの集団のうち、負け方が供犠されるようになったというのである。

(2) 凌純聲の説

凌氏はかつて古銅鼓の船形紋から龍舟文化は古の雲夢の沢あたりにその起源を持つと考えた。その著「記本校二銅鼓兼論銅鼓の起源及其分布」⁽²⁵⁾において、雲夢大沢で発見された船形紋の型式は中国南部の五月端午に行なわれる競渡の龍船および台湾紅頭嶼の丸木舟に酷似しているといっている。

三・四千年以前の雲夢の大沢は、湖が陸地より多く、港湾が交錯し、交通は舟楫に頼らなければならないようなところであったことが、古銅鼓の紋様から伺われるという。ここには黎獠族が住んでいたが、龍舟文化はこの黎獠族の文化の一つであると凌氏は考える。後になって、この黎獠族が北方に住んでいた中国系諸民族（漢、撣、藏、緬、苗、徭等を包括する）の侵入を受け、あるいは同化し、あるいは圧迫されて西南に遷移し、半島を経て後群島に達したことによって、龍舟文化は大陸南部、半島、群島にまで伝えられた、というのが凌氏の解釈である。

(3) 馮漢驥の説

馮氏は、1959年、雲南省の晋寧県石寨山の古基群から出土した銅鼓の紋様は滇族の文化を写したものだとする。しかも、それらの紋様のうちの船形紋は、「競漕」そのものを示すものだと言った馮漢驥氏はいう。また、「競漕は本来長江流域の多水地の水上遊戯である」とのべ、さらに、「滇人は自ら楚の将、莊蹻の末裔と称しているので、その水上遊戯も、あるいは楚俗と関係があらう。」といい、競渡の起源を楚俗に由来すると見ている。

(4) 君島久子の説

君島氏は「竜神（竜女）説話と竜舟祭」⁽²⁷⁾において、競渡は沅、湘あたりに住んでいた山地種族から始まったとされる。同氏は「武陵競渡略」という書物の冒頭に記されている「競渡は沅、湘の間に始まる」という文と

劉禹錫による「競渡曲自注」の「競渡始於武陵，及今舉楫而相和之」とを引いて、競渡の起源地を武陵にある沅、湘のあたりだと推測しているのである。

以上、4人の学者の説をあげたが、研究の内容や結論は研究方法によって、それぞれ相違しているが、しかし、そこには一つの共通点があるように思う。即ち、龍舟競漕の発祥地が一致している点で、いずれも揚子江の中流域か下流域を龍舟競漕の発祥地と想定しているのである。龍舟競漕といわれる行事はもともと水と縁の深い行事なので、大陸で「漁米之郷」でよく知れている揚子江の中流域ないし下流域を、龍舟競漕の発祥地としている点は妥当であろう。また、農耕時代の中国において、そうした「漁米之郷」のところで龍舟競漕が行なわれた原点は、稲作の豊収祭とつながるからであろうと考えられる。このようにみえてくると、凌純聲氏の説くように、私もまた黎僚族が稲作豊穰を祈るために最初に龍舟競漕らしい行事を営んだのではなかろうかとの推断に達するのである。

Ⅳ 長崎ペーロン、沖縄ハーリーと台湾ペーリョンツェンのルーツについて

前章までに見てきたような由来や形状を持つ龍舟競漕は、現在、長崎、沖縄、台湾において行なわれている。この章では、これらの地域における中国系龍舟競漕のルーツについて考察してみたいと思う。

a. 長崎ペーロン

ペーロンとはいわゆる中国式の龍舟競漕であり、「白龍」や「排龍」の中国語の発音がなまった呼び方だそうである。『長崎市史』や『長崎市政65年史』などによれば、ペーロンは「南支那の唐人」が長崎にもたらし、その後、日本化されたいわゆる帰化風俗の一つとされている。ここにいう

「南支那人」というのは、福州の唐人達と見做される。

それでは、福州の唐人達はいつ、またどういう契機で中国式の龍舟競漕を長崎で復活させたのだろうか。明暦元年（1655）、この年長崎地方は暴風雨に襲われ、碇泊中の唐船が難破し多くの溺死者を出した。⁽²⁸⁾ 神風神は何を怒られたのか、ともかく神さまの気持をやわらげるため、に神様の好きなペーロン競漕をひとつ奉納しよう、と長崎在留の唐人達はさっそくありあわせの端舟や船板を借り集め、また一つには自国の優秀な遊戯を長崎人に誇示しようとする気持ちも手伝って競漕を行なったといわれている。⁽²⁸⁾

しかし、この通説となっている長崎ペーロンの由来の年代については異論も提出されている。

柴田恵司氏は「長崎のペーロンとそのルーツ」⁽²⁹⁾において、『長崎市史』によると、ペーロンの起源を『長崎実録大勢』によって、明暦元年とする説が一般に行なわれているが、これ以前にも『コックス日記』（元和三年五月）その他にもペーロンの記載があり、長崎開港後間もなく伝えられたと考えられている」と述べる。

さらに、西村真次氏も「ペーロンの構造とその由来」の中で、「ペーロンは決して明暦年間などに起ったものでなく、漁師の間に古代から行なわれてゐる者が、偶然長崎附近に残って居り、それが支那人の龍船競渡と結びついて特殊の発達をしたのである」⁽³⁰⁾と結論しておられる。従って、ペーロンが長崎で開始された年代は未だ確定できないが、その導入には中国の福州人が介在したことは確かであろう。

b. 沖縄におけるハーリー

長崎ペーロンに対して、中国の龍舟競漕を模している沖縄での龍舟競漕はハーリーと呼ばれる。そして、沖縄のハーリーの起源について書いてある貴重な文献は『球陽』⁽³¹⁾という沖縄の史書である。それによると、沖縄の

ハーリーは下記の三つの中のいずれのルートで伝来したとされる。

(1)閩人三十六姓が琉球に来て帰化し、那覇江でハーリーを行なった。(2)長浜大夫というものが、国王の命を奉じて閩を経て南京に行った時、ハーリー(龍舟)をならって帰ってきた。その後、太平を祝うために爬竜船を造って競漕をさせることが行なわれた。(3)南山王の弟の汪応相が南京に留学したときにこれをならってきた。帰ってから豊見城城下の入江で競漕を初めて行なったという。

このように、沖縄におけるハーリーの由来は一見、複雑のように感じられるが、その伝来の経路はそれほど複雑ではないと私は思う。一つは中国の福建省からであって、もう一つは中国の南京からである。しかし、位置関係からいえば、当時沖縄と中国との間のかけ橋は福建であって、南京まで行くにしても、まず福建を経なければならないという状態にあっただろうと思われる。

記録によれば、長浜大夫はかつて福建を経て南京に行ったという。そうだとすると、汪応祖や留学生たちが南京へ留学したとき、福建を経由しないはずはないだろう。福建を経て南京まで行くという道順からすれば、留学生たちが福建系の龍舟競漕をならった可能性を考えることができる。従って、沖縄におけるハーリーは福建系統のみに帰すべきか、あるいは福建系統と南京系統の両方に帰すべきかという点が、つぎの研究課題となろう。

c. 台湾におけるペーリョンツェン (扒龍船)

台湾における扒龍船競漕が中国系龍舟競漕を祖としていることは当然であろうが、大陸のどこから渡来したのかという問題が残る。まずその呼称からこの問題を解明して行きたいと思う。

扒龍船という語は台湾語の発音では、「ペーリョンツェン」、「ペーロン」

などとなる。これは福建称呼圏の唱え方の亜流にほかならない。このことから、福建省から華僑が台湾に移入したときに、扒龍船も渡船安全、交通平穩を祈願するために同時にもたらされたのではないかと想像される。

台湾で実施したアンケート調査によれば、現在宜蘭県における扒龍船は国姓爺・鄭成功が渡台する前に、もうすでに福建から伝わっていたとされるから、200年の歴史があることになる。また、台南市安平運河で行なわれている扒龍船は、アンケート調査によれば、中日甲午戦争（西暦18C）前に、福建省泉州人によってもたらされたものだといわれている。

これらの外に、潘迺楨氏の「士林歳時記」⁽³²⁾には、士林街洲美にも爬龍船が行なわれたとあるが、これは清仏戦役（西暦18C）以前のことであった。これは河南省より福建省漳州へ、さらに台湾島士林地方へと移住した農民達によって伝えられてきたものだそうである。

こういうように、台湾における扒龍船の渡来のいきさつは地方によって、多少異なっているが、その導入先がいずれも福建であることは共通している。

以上、長崎、沖縄、台湾の三地域における龍舟競漕のルーツについて見てきたが、どれも福建系の龍舟競漕と縁が深いことが明らかになった。

V おわりに

結局のところ、龍舟競漕にある「競漕」の意味づけはどこにおくべきなのであろうか。そもそも、「競漕」という語の原意は「ボードなど、一定距離を速く漕ぐのを競うこと」とされている。しかしながら、民俗行事の一つである龍舟競漕の「競漕」の意味は、本来のそれとは違って、「行事化」されており、神に対する奉納行為や豊穰祈願の占い行為を意味すると見てもよいと思われる。

もっとも、中国における龍舟競漕の競漕は占い行為よりも奉納行為の意

味が強いと思う。「漁米之郷」と呼ばれている揚子江の中、下流域は、米の多産地だから、ほぼ毎年豊作が期待できるであろうし、別に、競漕によって、豊、凶を占わなくてもよいと考えられる。むしろ、神の恩恵によって、毎年「有餘」（余りのある）の米が生産できて、神の恩恵に報いるために、水神を喜ばせるような龍舟競漕を行なうことになったのではないかと推測されるのである。

これに対し、中国系龍舟競漕の流れの一つである沖縄ハーリーは、大漁祈願祭とも呼ばれて、豊年か凶年かの占い行為を強く伴う変型的な龍舟競漕と見える。沖縄では、ハーリー行事のほかに、綱引という行事や闘牛という行事が同じ占い行事の一環としてある。勿論、沖縄に限らず、日本では全国的にみて、民俗行事の中にそういった占い行為を伴う例は、枚挙にいとまないだろう。このように考えてくると、中国における民俗行事の中には、占い行為を伴う行事がないことに気づく。何故、中国には占いを伴う行事がないのか、この点も自らに課すべき今後の研究テーマの一つである。

注

- (1) 黒岩義嗣 「ペーロン大系」 長崎日日新聞、昭和4年5月10日～同年9月14日まで連載 (13)
- (2) 黄石 『端午礼俗史』民俗叢書102 P.117引用
- (3) 西暦605年8月、隋煬帝が洛陽より揚州へ出発した時に、乗っていた龍舟は4階あって、その高さは45尺（隋の時代には、一尺は現在の0.273米）、長さは200尺である。四階には正殿、内殿、東西朝堂が設けられて、二・三階には百二十の部屋があり、すべてに金や玉などの装飾が施され、また、一階には内侍の部屋がある。以上、『中国科技史话丛书』の「漫话龙舟」76頁から引用。
- (4) 婁子匡・許長楽 「五月五日龍船鼓」 台湾民俗源流 P.15～16参照
- (5) 宗懐 『荆楚歲時記』（守屋美都雄訳注、布目潮風他補訂） 東洋文

庫324

- (6) 婁子匡 『歳時叢話』 民俗叢書103 台北東方書局印行 P.131引用
- (7) 『中国科技史话丛书』 造舟史话 上海交通大学・上海市造船工业局
《造船史话》編写組編 上海科学技术出版社 P.76参照
- (8) 『中国科技史话丛书』 前掲書 P.77参照
- (9) 書名。二卷。撰者未詳。(四庫提要・史・編年類)
- (10) 書名。四十卷。後魏の酈道元撰。(四庫提要・史・地理類)
- (11) 書名。十卷。秦，王嘉撰。(四庫提要・子・小説家類)
- (12) 桑山竜平 「競渡と屈原」 天理大学学报(學術研究会誌) 85 (澤田瑞穂教授還暦記念特集) P.23参照
- (13) 山本達郎 「競渡考」 東洋史研究 8-1 1943-2 P.37引用
- (14) 馬淵東一 「爬竜船について」 沖縄文化論叢 2 (「沖縄文化」16・昭39) 平凡社
- (15) 文崇一 『九歌中的水神與華南的龍舟賽神』 民族学研究所集刊第十期 P.197参照
- (16) 文崇一 前掲書 P.175参照
- (17) 文崇一 前掲書 P.168参照
- (18) 鈴木清一郎 『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』 P.389参照
- (19) 黄石 『端午礼俗史』 民俗叢書102 P.117引用
- (20) 書名。八十五卷。唐・魏徵等奉勅撰。正史，廿四史の一。(四庫提要・史・正史類)
- (21) 書名。百二十卷。南朝宋，范曄撰。(四庫提要・史・正史類)
- (22) 運文 「閒談端午節」 台湾省政 中華民國68・6・15 3-6 P.32
- (23) 柳沢新治 「船漕ぎ祭りの道」 中央公論歴史と人物 1981-3 P.193~194
- (24) 宗懔 前掲書 P.154
- (25) 凌純聲 「記本校二銅鼓兼論銅鼓的起源及其分布」 文史哲學報 第1期 1950
- (26) 馮漢驥 「雲南晋寧出土銅鼓研究」 文物第1期 1974 P.59~60 参照
- (27) 君島久子 「竜神(竜女)説話と竜舟祭(1)」 国立民族学博物館研究報告 2卷1号 1977. 3 P.34~62
- (28) 『歌とまつりと踊り』 長崎県經濟部観光物産課 P.78

『観光の手びき』 長崎市 P. 81

『市政65年史』 長崎市 P. 1148

(29) 柴田恵司 「長崎のペーロンとそのルーツ」 海事史研究38号（日本海事史学会）

(30) 西村真次 「ペーロンの構造と其由来」 造船協会雑纂 P. 35

(31) 『球陽』は今から223年前の尚敬王の時代に出来た史書である。その巻一察度王45年のところに龍舟競渡説という記載がある。

(32) 潘迺禎 「士林歳時記」 民俗台湾 1 - 6

（大学院学生）